
川崎リビングラボ 「介護施設（リビングラボ）を 学び場とした人材育成プログラム」

背景と事業の狙い

背景

SDGs（持続可能な開発目標：解くべき社会問題集）で掲げられているような、まだ解き方が分かっていない社会問題をコミュニティや生活現場に落とし込み、そこに存在する具体的な課題と結び付けて解決（産業化）していくことで、大きな社会インパクトをもたらせるイノベーション人材開発が求められている。

超高齢化社会という現実に向けて需要の高まる福祉の現場において、人手不足・他産業に比べた生産性の低さが課題であり、解決を担う人材育成・仕組み構築が急務である。

事業の狙い

本事業では、リビングラボ化された介護施設を、新たな学び場として活用することで、企業（作り手）と現場スタッフ（使い手）とが、価値創造と技術開発力（技術開発支援力）を涵養する人材教育プログラム（共進化型教育プログラム）を開発する。

学習対象者（企業、施設スタッフ、学生、地域。他の社会福祉従事者）は、SDGsや社会インパクトの基本的考え方、認知症など変化していく人の科学的見方やQoLの考え方、行動ライブラリを用いたデータ駆動型開発などの基本講座に加え、リビングラボを活用した実践的ワークショップに参加することで、社会インパクトとリンクした具体的課題の設定力、多職種を巻き込む力、個人のQoLを中心とした生活機能レジリエントサービスの開発力を育むことが可能となる。

【企業（全19社）】×【施設スタッフ（介護・看護・栄養士・ケアマネジャー・事務）】による
共進プログラム

オリエンテーション

（プロジェクト全体の目的と課題の共有）



基礎講座

（個別OJTプログラム、ABC理論、行動データライブラリの共有）



実際の介護現場でのOJT実施

企業と施設の対話、製品やサービスの活用を通して得た気づきや課題をテーマに、
OJTプログラムやABC理論を活用することで、多くの学びを得た。



ABC理論ワークショップ

企業×施設
ワークショップ発表



介護現場でのOJT

実施内容 詳細② * P2 F

体験型プログラム：公開講座の実施

狙い：「人生100年時代の福祉のあり方」「人生を選択できるのは自分自身」をテーマにし、公開講座を実施。

対象：介護施設職員・賛同企業に加え、学生（福祉、看護学部その他、工学部など理系）、地域住民の方々とし、
ここから「未来の福祉イノベーター」また「福祉業界を志望する若者」が生まれるきっかけとしていく。

公開講座①：テーマ「知る」

日時：2019年1月14日 17時～20時

場所：藤沢ミナパーク

人数：受講者 105名 内 企業5社・学校3法人・学生9名・他職員及び地域住民

対象：介護施設職員・企業・学生・地域住民・福祉従事者

内容：パート①

タイトル “人生100年時代における私たちが知るべき真実と考えるべき未来”

講師 経済産業省 政策統括調整官 江崎禎英 様

パート②

タイトル “福祉施設におけるAI・テクノロジー・ビッグデータの活用の可能性”

講師 産業技術総合研究所 人工知能研究センター 西田佳史 様



実施内容 詳細③ * P2 F

体験型プログラム：公開講座の実施

公開講座 ② テーマ「体験」について

日時：2019年2月3日

場所：鎌倉芸術館 大ホール及びホワイエ

内容：

パート① (at 鎌倉芸術館 ホワイエ) 人数：受講者 約30名

「未来の教室」として「特別養護老人ホームクロスハート幸・川崎」で実施内容の体験講座

→実際の「利用者と介護スタッフのニーズ」をテーマに、それに応えることができる製品やサービスを開発するためのOJTトレーニングを模擬体験

→賛同企業にも協力いただき、実際の製品開発の背景や現在の課題の説明

→単純な「製品PRや体験会」とは違い、人生100年時代を考える視点や、介護の課題から生まれた「リビングラボを活用した学び（未来の教室）」をまとめた、映像データ、テキスト、また個人ワークブックを活用し、自身の学びを深める仕組みとする。

パート② (at 鎌倉芸術館 大ホール) 人数：受講者 約2,000名

伸こう福祉会主催ミュージカル「Beautiful Life～新しい社会の福祉の在り方」を公演し、下記の主要テーマを体感してもらう。

→「人生100年時代の社会のあり方」「これからの人生最期の時と看取りのあり方」「リビングラボとテクノロジーを活かした介護施設」

「できることは、できる限り利用者自身がやることを大切にする介護のあり方」「仕事付高齢者住宅」





実施内容 詳細④ * P2 F

体験型プログラム：公開講座の実施

公開講座 ③ テーマ「経験」

日時：2019年2月16日 場所：横浜アットビジネスセンター

人数：受講者 61名

介護・保育職36名（管理者クラス11名 若手12名 他19名）

学生11名 地域6名 企業1名 大学1名

内容：

パート① セッション①&②の振り返りと全体共有

パート② 「世界から見た、日本の介護イノベーションの期待と可能性」

～福祉現場の生産性の向上と人材育成の必要性～

講師 経済産業省 サービス政策課長 浅野 大介 様

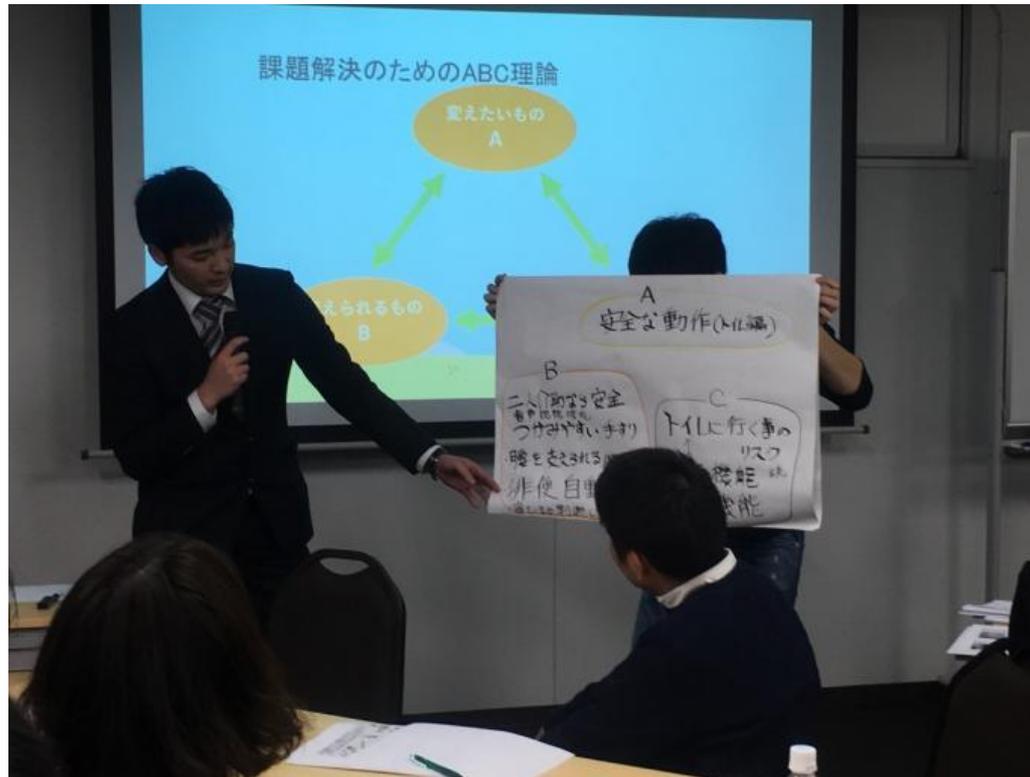
パート③ 「イノベーションを生み出す要諦」～ABC理論とリビングラボ～

講師 産業技術総合研究所 西田 佳史 様

パート④ ワークショップ → 人生100年時代をテーマに受講者個人・職場・周辺のライフデザイン&キャリアデザイン



実施内容 詳細④ * P2 F



成果：概要

達成したい状態

- ① 介護施設職員・企業ともに、具体的課題の設定力、多職種を巻き込む力、個人のQoLを中心とした生活機能レジリエントサービスの開発力を育み、創造力・観察力・発想力・思考力・コミュニケーション能力など様々な能力の芽生えや向上が現われている
- ② ①を達成するための教材の作成
- ③ 現時点で介護福祉に関わりの無い地域住民や学生にたいして、介護福祉の現状をしり課題を共有し、意識変容が起こる（関心を持つ・問題意識をもつようになる）

実際の達成度

- ① 参画した企業および介護施設職員からの聞き取り調査を行い、本事業を通して得られた様々な変化（コンピテンシー）データを収集
また、事業開始前後で、参画者の意識の変化を測定するため、事後アンケートを実施。
- ② プロトタイプの完成
 - ABC理論で考える問題解決の方法
 - 「変えたいこと」を発見するために～行動ライブラリ&リビングラボを活用しよう～
 - リビングラボが目指すもの
- ③ 介護福祉の現状をしり課題と希望を認識した結果、意識変容が起きた（関心を持つ・問題意識をもつようになった）

理由・改善/発展の方向性

- ① ABC理論の観点で、調査データを整理しエピソード集とした。ここでのエピソードとは、企業側・施設側が共通の「C:変えられるもの」に気付くことでどのように成長し、「A:変えたいもの」を変えるための1歩となったかを記載したものである。エピソード集としてまとめることで、リビングラボを実践する場合に必要なスキルを意識的に身に付ける場合に役立つ教材として活用する
- ② 作成した教材を活用し、来年度、学生向け、施設スタッフ向け、企業向けの教育プログラムを開催予定。また、施設職員には、職員向けに特化した教材が望ましいという意見があることを踏まえ、来年度の作成に向けて検討中
- ③今年度はプロトタイプと位置づけている。来年度に向けて、横展開（他の社会福祉事業者・行政等）を視野に入れて標準化していく

成果：詳細 ABCワークショップとOn-the-Job Training (OJT)

実施内容：P3 A~E 及び P4~P5 *詳細は別紙1 報告書参照

学びの効果測定方法

第1回学びの基礎講座：ABC理論の後、講座の参加者（企業（開発者）および介護スタッフ）を対象にアンケートを実施した。また、本事業で実施した座学とOJTの教育効果を測定するため、2019年1月28日に同じアンケートを参画者にメールで配布し実施した。

【アンケート評価項目】

1. 介護機器に触れる際、利用者と機器との関係を、どの程度、注意深く観察できていると思いますか（観察）
2. あなたが何かの課題に気付いた時、自分からその課題解決方法を皆に提案することに、どの程度、自信がありますか（提案）
3. あなたは、現在、自分がいろいろな知識をより深めたいという思いから、自ら学習したり、調べたりする意欲が、どの程度ありますか（学習意欲）
4. あなたは、自ら課題解決に関わりたいという思いが、どの程度あると思いますか（課題解決意欲）
5. 「人の意見を受け入れること」に、その程度、抵抗がありますか（傾聴）
6. あなたは、介助方法を変更する時、データに基づいて変更することが、どの程度、大切だと思いますか（データ駆動）
7. 何か課題があった時、ABC理論に基づいて解決策を考えることは難しいと感じますか（課題解決発想）
8. 課題を解決するために、周りの人が持っている「変えられるモノ」に気付くことは、どの程度、大切だと思いますか（巻き込み）

成果：詳細 ABCワークショップとOn-the-Job Training (OJT)

実施内容：P3 A~E 及び P4~P5 *詳細は別紙1 報告書参照



R氏（企業）

オリエンテーション（課題共有）・職員との対話を通じて課題解決意欲が向上している一方で、観察力、課題解決発想力の2項目において、自分に対する評価が下がっている。

これはOJT中に、導入機器の改善点や新しい課題を見いだせた一方で、**現場導入の難しさを実感したり、介護現場の実態を目の当たりにしたことで、OJT開始前とは違い、客観的に自分を評価した結果**であると考えられる。

R氏に行ったインタビューでは、現場と企業との間のデータのやり取りの問題がかなり大きく、必要なデータが見れないのですぐに改善できない、というジレンマがあること、**「A:変えたいことは何か」を常に問い直すことの重要性に気付いた**、というコメントもみられた。

成果：詳細 ABCワークショップとOn-the-Job Training (OJT)

実施内容：P3 A~E 及び P4~P5 *詳細は別紙1 報告書参照



U氏 (企業)

観察以外の多くの項目が低下傾向にあった。

OJT後のアンケートでは、現場介入度合いの不足感や他参加企業との連携の不足感などを訴えており、その結果が表れていると思われる。

一方で、OJTを通じて、**個別対応の大切さに気付き、自社製品が現場スタッフの負担軽減に寄与できると確認できたことが大きな成果**であり、自分の持っている「C:変えられるモノ」は、「自社ビジネスの領域」、「競合企業との距離感」、「ライバル心」と回答していることから、今後の展開に期待できる企業であると言える

成果：詳細

ABCワークショップとOn-the-Job Training (OJT)

実施内容：P3 A~E 及び P4~P5 *詳細は別紙1 報告書参照

OJT実施の前と後に、企業・介護スタッフにレポートの提出を依頼し、それぞれで得られた気づきを示す。

【企業が得られた気づき】

- 導入機器を使った高齢者本人から、具体的な改善案・コメントをもらった
- **良いと思って開発した機能だったが、違うリスクを発見できた**
- 実際の利用者を観察できた
- 介護職員が自作でカスタマイズした製品をみて、新しいニーズやアイデアを確認できた
- 実際の現場で検証し改善点などをリアルタイムで確認することができた
- **メーカーとして独りよがりだったと気付かされることがあった**
- 導入機器は、現場の負担を減らすことができると実感できた
- 介護職員と連携しながら、具体的な評価方法を一緒に検討することができた
- 販売促進につながる意見を得られた
- **自分たちが想定していなかった効果（利用者の自立度向上）があることが分かり、リハビリ機器としての展開可能性などが見えた**
- **介護職員それぞれが大切にしているポイントにもバラつきがあり、それをどれだけ企業側が汲み取るかが大切であるかが分かった**

成果：詳細 ABCワークショップとOn-the-Job Training (OJT)

実施内容：P3 A~E 及び P4~P5 *詳細は別紙1 報告書参照

OJT実施の前と後に、企業・介護スタッフにレポートの提出を依頼し、それぞれで得られた気づきを示す。

【介護スタッフが得られた気づき】

- 現状、現場の負担は増えたが、今後技術が進化していくことに希望も感じた
- **これまでは、製品単体の機能について評価しがちだったが、製品が本来提供できる機能全体として、どう機能するのか、という広い視点で考えることが大切だと分かった**
- **こんな道具があればもっと楽になるのではないかと、利用者さんにとってもよくなるのではないかと考えられるようになった**
- **企業の人に、製品の使い方について全スタッフに説明してもらうのは難しいので、どう伝えていくかを現場側でも考えることが大事だと思った**

成果：詳細 ABCワークショップとOn-the-Job Training (OJT)

実施内容：P3 A~E 及び P4~P5 *詳細は別紙1 報告書参照

OJT実施の前と後に、企業・介護スタッフにレポートの提出を依頼し、それぞれで得られた気づきを示す。

【介護スタッフが得られた気づき（要改善点）】

- パートの方が多いので、製品の使い方や機能が上手く伝わらず、**新しい発想が出にくい現状があった**
- 企業の方に積極的に現場に入ってもらえたら、新しいアイデアを得られる可能性が高いと思った
- **この製品を使うと、どう自分達（介護職員）の負担が減るのが分かりにくい**
- 職員の間でも、どう活用するとより高い効果が得られるかを考える機会があればよいが、実際にはそれを話し合う機会や場はほとんどない
- 利用者の方ができないことを支援する製品だけでなく、できることをサポートできる製品もあつたらよいと思った
- 現場の問題として、パートの方を含む全スタッフと、**どう情報を伝達するかは大きな課題だ**と思った

成果：詳細 ABCワークショップとOn-the-Job Training (OJT)

実施内容：P3 A~E 及び P4~P5 *詳細は別紙1 報告書参照

OJT実施の前と後に、企業・介護スタッフにレポートの提出を依頼し、それぞれで得られた気づきを示す。

【企業側】

企業側は現場から多くの知見を得たことが分かる。
中間発表会では、企業間連携の可能性も議論された。
これは、ABCワークショップを通じて、
川崎リビングラボのビジョンを共有し、
そのビジョン実現のためにできることは何かを模索した成果と言える。

【介護職員側】

現状、負担は増えたものの、多くの職員が開発者の視点を持ち、
どのような機能が実装されると、利用者の方だけでなく、自分達の役に立つか、
と考えながら業務を行うスキルを獲得した。



成果：詳細 ABCワークショップとOn-the-Job Training (OJT)

実施内容：P3 A~E 及び P4~P5 *詳細は別紙1 報告書参照

狙い：「人生100年時代の福祉のあり方」「人生を選択できるのは自分自身」をテーマにし、公開講座を実施。

対象：介護施設職員・賛同企業に加え、学生（福祉、看護学部その他、工学部など理系）、地域住民の方々とし、ここから「未来の福祉イノベーター」また「福祉業界を志望する若者」が生まれるきっかけとしていく。

セッション1・「知る」をテーマに、主に座学形式で、「人生100年時代に求められるもの」について講座を実施。

受講者 105名（内 企業5社・学校3法人・学生9名・他職員及び地域住民）

実施内容：P2 F 及び P6~P10

セッション2・「体験」をテーマに学生・地域住民・企業・職員に向けてリビングラボの疑似体験、「人生100年時代の社会」をテーマにしたミュージカル講演への参加を実施。

受講者 約30名（学生・地域住民・企業・大学・研究機関・介護保育職員等）

セッション3・「経験する」をテーマに川崎リビングラボでの実践を例に「福祉の課題認識」「イノベーション」「人生100年時代を自分事として捉える」事をワークショップ形式で実施

受講者 61名 内介護・保育職36名（管理者クラス11名 若手12名 他19名）

学生11名地域6名 企業1名 大学1名

成果：詳細 **体験型プログラム 公開講座の実施（プロトタイプ）**
講座「知る」・ミュージカル参加「体感」・ワークショップ「経験」
実施内容：P 2 F 及び P6～P10

学びの効果測定方：各sessionへの参加前と参加後，参加者を対象にアンケートを実施。

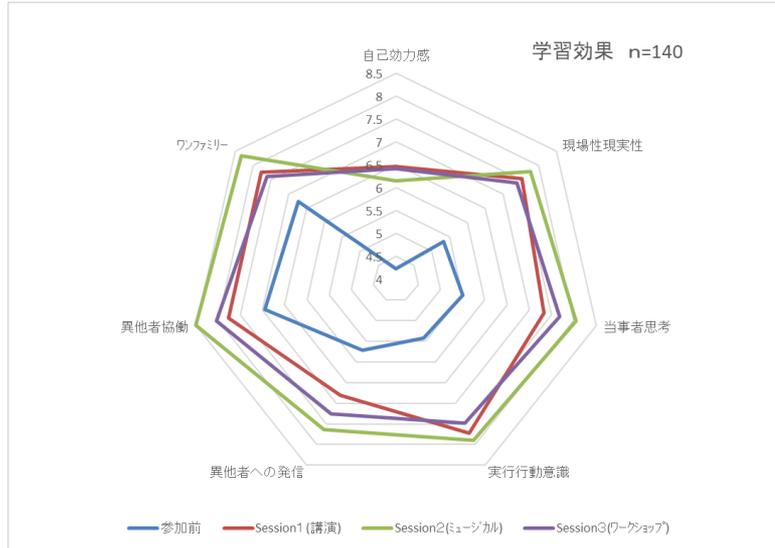
【アンケート評価項目】

- 1. 歳をとる(お年寄りになる)ことは心配なことですか、わくわくすることですか（自己効力感）**
- 2. 身近な日常や現場と『人生100年時代』は結びつきますか(現場性現実性)**
- 3.『介護を受けること』は自分事(ジブンゴト)ですか、他人事(タニンゴト) ですか（当事者思考）**
- 4. 『人生100年時代』をよりよくするためにあなたにできることはありますか（実行行動力）**
- 5. 年齢や立場、考えの違う人に自分の意見を言うことができますか（異他者への発信）**
- 6. 年齢や立場、考えの違う人と協力したり一緒に活動することは（異他者協働）**
- 7. 年齢や立場、考えの違う人は「関係のない人」ですか、「同じ仲間」ですか（ワnfamily-意識）**

体験型プログラム 公開講座の実施（プロトタイプ）

講座「知る」・ミュージカル参加「体感」・ワークショップ「経験」

成果：詳細

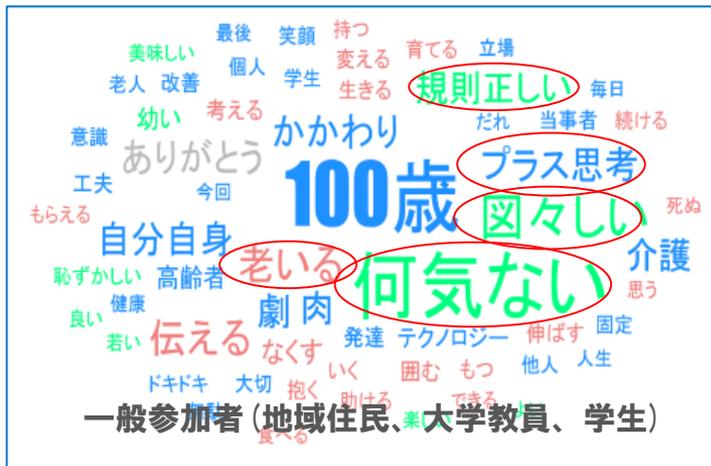


参加前の認識では「人生100年時代」といった、日常的に意識化されにくい社会的なテーマに対しては「自己効力感」「現場現実性」「当事者思考」「実行行動意識」などは極めて低い値であった。

しかし《session1知る》に加え、ミュージカルへの参加《session2体感》、ワークショップへの参加《session3経験》を経て、変容を促進していることがわかる。

このような継続的、体感的な参加形態は効果が優れている。一方、こうした場を設定するのは必ずしも容易ではない。

この意味で、現場でのワークショップとOJTを組み合わせたリビングラボは、「体感」と「経験」による効果を効率的に提供できる形態となり得ることが推測される。

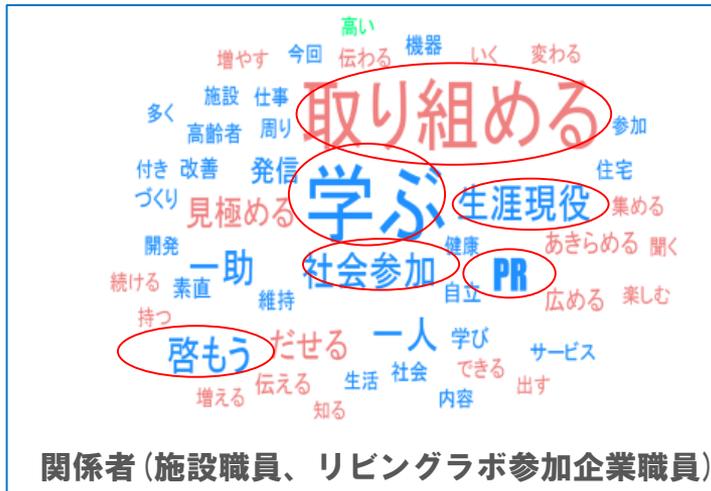


自由記述回答「人生100年時代。自分にできることは何か」についての
ワードクラウド分析の比較

★リビングラボ関係者は 社会への働きかけに視野が広がっている

単発でのイベント参加など、一般参加者においては、
「何気ない」「図々しい」「プラス思考」「規則正しい」といった
自分自身の生活スタイルに特徴語の関心が表れている。

一方、リビングラボと直接関わりのある企業・職員においては、
「取り組める」「学ぶ」「生涯現役」「社会参加」「PR」「啓もう」といった
社会への発信や行動にまで視野が及んでいることが推測される。



関係者 (施設職員、リビングラボ参加企業職員)

成果：詳細(参加者の気づきコメント) 実施内容：P2 F 及び P6～P10

参加講座	属性	年齢	あなたが、変わったこと 変えられること	「人生100年時代」 どんな時代になっていたら良いか？	「人生100年時代」 自分ができることは何ですか？
S1	大学教員A	50	今後の自分の生き方・今後の自分の仕事の在り方	◆高齢者の自己実現を支える社会 ◆子育てを社会が支える社会	当事者になる事
S3	大学教員B	70	どんな人も高齢になる。 介護を必要とする時もある事を再認識した	高齢になって「生きている事を幸せだと思える社会」	◆学生を育てる立場にある人間として、だれもが老いる 高齢者になる、事をプラス思考で考えられるよう伝える工夫をしていきたい
S1	企業A	50	事業の一面をみるのではなく、複眼的にみる事 誰もができる事でお互いに助け合う	医療の負担を減らす。予防のための検査薬の開発	-
S1	企業B	40	介護施設を身近に感じられた	教科書の子供が大人を支える図はなくすべき	仕事付き高齢者住宅のPR
S1	企業C	50	長寿はすばらしい。 そのような世の中になるように貢献したい	◆生き甲斐を見つけられそれを持ち続けられる社会 ◆身体機能が低下したとしてもそれを補うツール機器によりやりたい事ができる社会	社会参加・自立した生活を維持するための 機器やサービスの開発
S1	企業D	50	◆高齢化が進む社会は暗いものという認識が変わった ◆60歳は人生の一巡目であるという認識を持た ◆日本が世界で進む高齢社会対応・対策のリーダーになりえる	高齢者も生き甲斐を持ち人生を楽しめる社会	◆自分が健康である事。自分の周りの人に健康を啓もうする事 ◆生涯現役でいられるための社会づくりの一助
S1	企業E	50	◆人生の2週目という考え方で明るい気持ちを持たた事 ◆国の考え方に対し、嬉しい気持ちになれたこと	◆お年寄りが自分を誇らしく思える社会 ◆それを支える人（介護者）が「かっこいい」とされる社会 ◆死に対して全ての人々が深く理解をしている社会	◆施設を学びの場とする事 ◆多くの人々が知るべき内容
S1	地域住民	50	◆「視点を変える」「常識を変える」今の自分にかけている ◆高齢化の定義を変える事で未来が劇的に明るくなる ◆高齢化社会の問題提起のみならず、輝ける未来のイメージがわき、大変前向きな気持ちになれた ◆川崎L.Lの取り組みは衝撃的でした。施設のIT課は限定的なものであると勝手に思っていた。無限の可能性を秘めていると思った。	◆年齢によるしほりではなく、身体が動き元気であればいくつになっても働く事ができる社会の仕組み ◆受け皿を作るべき	◆まずは自分自身が毎日ワクワク ◆ドキドキできるよう楽しく健康に生きる事 ◆世の為人のための意識を持ち続ける事

成果：詳細（参加者の気づきコメント） 実施内容：P 2 F 及び P 6～P 10

参加講座	属性	年齢	あなたが、変わったこと 変えられること	「人生100年時代」 どんな時代になっていたら良いか？	「人生100年時代」 自分にできることは何ですか？
S 1	学生 A	20	<ul style="list-style-type: none"> ◆高齢化に対する考えが変わった ◆入院する前に死にたいと思っていたが健康なまま死にたいと思った ◆100歳までいきたいと全く思っていなかったが、今回の話を聞く事ができて、健康なまま長生きできるのなら幸せだと思った。 	笑顔あふれる思いやりのある社会	<ul style="list-style-type: none"> ◆老人にありがとうを伝える ◆お肉を食べて生きる。おいしいものをたくさん食べる
S 2			<ul style="list-style-type: none"> ◆できることを活かしてできないことだけ支える事 ◆生きる喜びを忘れない 	<ul style="list-style-type: none"> ◆テクノロジーが発達してひとりでもできることが増える ◆孤立してしまわないように人とのつながりを大切に 	<ul style="list-style-type: none"> ◆テクノロジーが発達しても人のかかわりは大切にする ◆人生最後を無駄に伸ばされるより劇のように人に囲まれながら あっさり死にたい
S 3			<ul style="list-style-type: none"> ◆ITの大切さに気づいた ◆固定観念をなくす 	<ul style="list-style-type: none"> ◆認知症がない社会 ◆変えられる型にはめる ◆IT導入がもっと安くできるように ◆「認知症があるから人の自由を奪ってしまう」という事を知り、本当に認知症がなくなってほしいと思った。 	固定概念をなくす
S 1	学生 B	20	<ul style="list-style-type: none"> ◆60歳を超えたら「リタイヤ」という認識をもってしたが、2週目の楽しい人生があるという認識に変わった ◆ABC構造のCに気づけるような視点を変える 	<ul style="list-style-type: none"> ◆毎日ドキドキワクワク 何か楽しい事のある社会 ◆持病の予防 ◆進行管理をみんなが心掛けられる社会 	<ul style="list-style-type: none"> ◆若いうちから医療を受けて大きな持病を予防する ◆2週目の人たちに助けてもらえるような関係づくりをする
S 2			<ul style="list-style-type: none"> ◆100歳までいきる自分をイメージできそうだった ◆若いうちに死にたいと思っていたけど老いるのも悪くない 	年をとってもやりたいことを何でもやれる社会	いろんな世代の人とたくさん話をする
S 3			<ul style="list-style-type: none"> ◆「高齢者はこれくらいが限界だろう」ときめつけない ◆新しい技術をどんどん試して企業にフィードバックをする ◆地域の子供と高齢者の関われる場所をつくる ◆働き始めてからこの講座を受けたら、また感じ方が違うだろうと思う 	最新の技術をみんながうまく使いこなせる時代・社会	<ul style="list-style-type: none"> ◆100歳になっても続けられる趣味をもち、生きがいにする ◆なんにでもチャレンジする気持ちをもつ

成果：詳細（参加者の気づきコメント） 実施内容：P 2 F 及び P 6～P 10

参加講座	属性	年齢	あなたが、変わったこと 変えられること	「人生100年時代」 どんな時代になっていたら良いか？	「人生100年時代」 自分にできることは何ですか？
S 1	学生C	20	<ul style="list-style-type: none"> ◆人は120歳まで生きられる⇒60歳からが人生の本番。高齢社会こそが本来の人生 ◆介護は生活支援ではなく自律支援をするもの ◆当たり前だと思う事を疑う事の大切さ・実行不能はそのままに実行可能など変化させることで問題が解決できる事 	<ul style="list-style-type: none"> ◆支えると支えられるの相互性が確立された社会 ◆一人一人が健康で生きるための予防を欠かさない時代 	<ul style="list-style-type: none"> ◆規則正しい生活 ◆年下という視点や、その偏見から抱く感情を持たない
S 2			<ul style="list-style-type: none"> ◆テクノロジー・技術を用いる事は「人に寄り添う」に直結する ◆老人ホームで認知症などの病気の症状緩和の支援が可能 	若者がお年寄りの方との距離感を作らず人生の先輩として助言などを素直に楽しく聞き入れる事が可能な時代	<ul style="list-style-type: none"> ◆自分が「ありがとう」を他人に伝える為に、人の話はや行為を恥ずかしながら受け取る。 ◆凶々しいと紙一重かもしれないが、その分自分も他人の為への働きで返せばよいと思った ◆全員が幸せになれる介護や生活支援とは何なのか？そのヒントを考える時間になった
S 3			<ul style="list-style-type: none"> ◆将来こうしたいという意識を持つこと ◆「100年生きられる」と思って健康観管理を怠らない時代 ◆人生のパーソナリティ面の理解に努める事 ◆働く事のビジョンが持てた 	—	—
S 2	学生D	20	<ul style="list-style-type: none"> ◆「人生100年時代って私たちなんだ」という事を強く感じた ◆今までよく知らなかった介護ロボットについて、自分から調べるようになった 	介護者がより利用者さんの個別ニーズを満たせるように今より人もロボットも進化してもらいたい	今、看護師になるか役者になるか迷っている。どちらになっても人生100年時代が「自分事」である事を伝えられるような活動をしたい
S 3			今日の学びを来ていない人と共有をする事で周りの人の考えにも変化を与えられると思った	年齢が理由で何かをあきらめる事がない社会	<ul style="list-style-type: none"> ◆介護について、今世界でどんな取り組みをしているのか、一人でも多くの方に伝える事 ◆今は看護学生だが、今回の話を聞いて経済やエンジニアの学生と一緒に介護の未来について考える場があったら良いと思った

成果：詳細（参加者の気づきコメント） 実施内容：P 2 F 及び P 6～P 10

参加講座	属性	年齢	あなたが、変わったこと 変えられること	「人生100年時代」 どんな時代になっていたら良いか？	「人生100年時代」 自分にできることは何ですか？
S 1	学生 E	20	<ul style="list-style-type: none"> ◆何歳になっても「わくわくする」「ときめく」が大切という事 ◆高齢者の方々はもっと人や社会の役に立ったりありがとと言われる事がしたいという事 	<ul style="list-style-type: none"> ◆いくつになっても趣味を持ち続けられる人が増えたら定年後も楽しく自分たちのしたい事 ◆やりたい事を社会や人に貢献ができるように若い世代が「年を取る」という事が楽しみと思ってもらえるような社会 	「何歳だから」とするのではなく、個人個人にできる事したい事を一緒に考える
S 3			<ul style="list-style-type: none"> ◆誰かにとっては必要不可欠な事であっても、違う誰かにとっては障害になる事、という考え方はとても斬新で改めてバリアフリーなどについて考える機会になった。 ◆自分がこれ医者になったらどうなっていたいか、何がしたいかをきかをもっと考えたり想像していこうと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆利用者全員がその方らしいその方だけの人生を過ごす事のできる環境が当たり前になってほしい ◆どんなに I T が進歩しても情や心は変えられないと思うので、これから先は今よりも人と人が支えあって寄り添える社会になってほしい 	<ul style="list-style-type: none"> ◆利用者一人一人に寄り添って少しでも笑顔を増やしていく ◆幼いうちから「100歳までいきたら」などについて考える機会を子供に作りたい ◆今回の講座で、少しでもより良い人生にしていく為に笑顔でいる事の大切さを学び、いくつになっても好きな事・やりたい事を見つけて楽しめることを大切にしていきたい
S 1	学生 F	20	<ul style="list-style-type: none"> ◆高齢化＝暗い未来ではないと知る事ができたことによる価値観の変化 ◆普通の生活の中で少し意識する事を変えるだけで物の見え方が大きく変えられる事 ◆自分たちの今後の生活を良い方向へと変えられるという可能性を知れた 	<ul style="list-style-type: none"> ◆人々が生きる中でやりたい事をやれる社会 ◆自分を見失わずに一生をまっとうする事ができる社会 ◆心の余裕をだれもが持てるように 	—
S 3			<ul style="list-style-type: none"> ◆ A B C 理論での考え方の整理方法が身についた ◆自分と世代の違う人と積極的な意見交換をしようという意欲が沸いた ◆他人の意見を素直に着きれる事ができるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆誰もが楽しい人生を送る事ができる ◆退屈さ窮屈さを感じない ◆人生一生全盛期！ 	<ul style="list-style-type: none"> ◆日常のい何気ない事に疑問を持ち、改善できる点を改善 ◆介護の在り方・捉え方を変えていく ◆生きる上での意識を変える（淡々とではなく実直に受け止めてみる）

成果：詳細（参加者の気づきコメント） 実施内容：P 2 F 及び P 6～P 10

参加講座	属性	年齢	あなたが、変わったこと 変えられること	「人生100年時代」 どんな時代になっていたら良いか？	「人生100年時代」 自分ができることは何ですか？
S 2	施設職員 A	50	◆100年時代への不安が消えた ◆年齢を重ねる事が楽しみなった。 このワクワクを周囲に伝えたい	共生の時代。でこぼこピースを現実のものにしたい	今回の参加できなかった方にもワクワクを伝えたい
S 3			経産省（国）のイメージが180度変わった	老若男女・障害のある人もない人も隔てなく共生できる社会	◆周りにすぐには伝わらない。あきらめずに伝え続ける ◆一人でも賛同者を集めたい。特に異業種の友人に広めたい
S 1	施設職員 A	20	◆自分が高齢者になるまでにお金を貯める事が大事だと思っていたが、一番大事なのやはり健康でいる事 ◆介護職である為に要介護状態の方と接する時間が長く、自分の未来をいつの間にか大変な介護現場を基準にしてしまい、気持ちが暗くなっていた。講座を受けて少し前向きになれた	健康年齢が高くなる	◆健康でいる事・やりたい事に素直に取り組める事 ◆他の人の価値を積極的に発信できるようになる事
S 3			◆セッション 1 の時より、リビングラボの取り組みの価値 ◆内容を知れて良かった ◆技術の導入に現場の声が必要な事が改めて分かった ◆今自分がいる現場でも技術で変えられそうな事がある ◆変えてほしいところが多々見つかった	自分ができる事は自分でしてもらえるように安易に使える物・安全に使える物が増えればよい	◆利用者ができる事をしっかりと見極める・ ◆できる事に手を出さない ◆できない事を増やさない ◆勉強して改善策をだせるようになる
S 1	施設職員 B	40	ご利用者の方との向き合い方・考え方・親との向き合い方	自分らしく生きる・役に立てる・自分で決められる	学ぶ・楽しむ・素直になる
S 3			考え方・受け入れ方・生活	◆自分の考えで行動できる ◆自由が保障される・支えあっている	学ぶ・聞く・行動する
S 1	施設職員 C	20	◆今後の日本の人口割合当を改めて知り、超高齢社会がマイナスなことばかりではないと感じる事ができた。 ◆長く生きるなかで、一人一人の意識が改善予防できる事が多く有ることに気づく事ができた ◆A I 等活用できるものを活用して介護や保育を考えるべきであると感じた	◆生涯楽しめる人生を実現できる社会 ◆最新技術を活用できる社会 ◆一人一人が社会にとって必要と最後まで思う事のできる社会	◆時代や社会の変化と共に考え方や方法を変え増やす事 ◆意識を高く持つことで改善予防できる事を実践し発信していく
S 3			◆ワークショップを通して施設や介護施設の現状を知り、社会全体で今後の事を考えていく必要があるという事 ◆周囲に発信していく ◆意識の持ち方	◆みんなが協力しあう社会 ◆テクノロジーと人にしかできない事を組み合わせれる社会	周囲に発信していく

成果：詳細 教材・エピソード集 ＊別添

完成した教材の例

<p>ABC理論で考える 問題解決の方法 変えたいモノ・コトを解決するための方法</p> 	<p>A 変えたいモノ・コト 【現状】</p> <p>変えられないモノ・コトについて議論しても、問題は解決しにくい</p> <p>B 変えたいモノ・コト 【変えたいモノ・コト】</p> <p>変えたいモノ・コトについて議論しても、問題は解決しにくい</p> <p>変えたいモノ・コトについて議論しても、問題は解決しにくい</p>
<p>「変えたいこと」を 発見するために 現状を把握するための方法</p> 	<p>高齢者行動タイムラリ 高齢者の生活リズムを把握するための方法</p> 
<p>リビングラボが 目指すもの 変えたいモノ・コトを解決するための方法</p> 	<p>消費者行動の取り組み 消費者の行動を把握するための方法</p> 

エピソード集の例

<p>Episode innovator A0①↓</p> <p>モニタリングなので製品スペックについて必要最小限の規定の項目だけアンケートで意見をもらおう。</p>	<p>Care worker A0①↓</p> <p>人員不足で忙しいのに、製品モニタリングまで仕事を増やされたらたまらないや。</p>
<p>Notice 共通目的への貢献という視点に立ったコミュニケーション</p>	
<p>innovator A2</p> <p>現場でどう貢献できるかがわかれば、もっと利用される(売れる)製品の開発や販売方法のヒントになるかも!?</p>	<p>Care worker A2</p> <p>新たな製品に触れたら、これまでできないと思っていたことが技術によって変えられるかもと思うようになったなあ!?</p>
<p>Episode innovator A1②↓</p> <p>日常の中で気づいたことを何でも教えて欲しい。</p>	<p>Care worker A0②↓</p> <p>日常業務では「介護」に追われているから、あらためてラボについて気づいたことを発信する場も機会もないなあ。</p>
<p>Notice 日常的発信のための場や方法の設定が重要</p>	
<p>innovator A1③</p> <p>アンケートやインタビューで発信のためのフレームを設定した方が新たな気づきを聞き取りやすいのかも!?</p>	<p>Care worker A1①</p> <p>気づいたことは主体的に発信していてもいいんだな。</p>

成果：発展の方向性

横展開を視野に入れた標準化

⇒ファシリテーター機能の効果と重要性

目的の共有深度に応じた効果的介入

再現可能性が低く感じられる「現場」での気づきは、
とかく、個人の気づきの力に依存せざる負えない。

しかし、今回の実証事業を通して得た学びがある。

異なる、役割、文化、思考などを持つ者が共進する際には、
とりわけ「目的」「理想」についての共有が不可欠である。
この共有度合いが、学習効果やモチベーションに影響する。

今回、介護職、技術者(イノベーター)とも、
自身の仕事、プロジェクト自体の課題の理解・共有の
レベルやタイプは違っており、
ファシリテーターは、そのレベルやタイプを診断し、
プロジェクトを進行することが求められる。

介護スタッフと企業スタッフとの目的共有のプロセス			
フェーズ		施設	企業
A0	参加しているが課題を共有していない状態	A0-①人員不足やルール整備が不十分なこと で、ラボに取り組める環境下でない A0-①ケアスタッフ・施設の機能が理解できていないため、ラボに対する関心が薄い A0-②ラボについて理解できていないがために、主体性・意欲が持てない	A0-①製品改善・宣伝のために現場でのモニタリング希望
A1	(製品課題の解決策の検討等)提示された課題のみ共有している段階	A1-①ラボに対して協力姿勢がとれる A1-②対象とされる製品について問われている事に無難にこたえる A1-③ポジティブな意見だけでなく、ネガティブな意見も述べる A1-④互いに使用している言語の差異に気づく	A1-①製品の持つ課題や、その解決策を求める A1-②製品の持つ課題の整理や共有認識を求める A1-③互いに使用している言語の差異に気づく
A2	共通の言語形成や課題を形成しようとする段階	A2-①他の製品と比較提案や指標的な視点が提出できる A2-②ガイドラインの作成に関与できる	A2-①ラボ製品と、それに類似した一般的な製品等の基礎知識をスタッフへ示し、更には計測したいデータや指標を提示 A2-②それらを円滑に運営する為のガイドラインを作成(必要に応じて協力)
A3	介護の生産性があることが実体的共通課題であると認識が深化した段階	スタッフ：生産性の向上 ⇄ 企業：製品の市場化	
A4	介護の生産性向上から入居者自由度向上を実体化しようとする段階	介護の生産性向上 ↓ 入居者の自立(自由)度の向上	
A5	チェンジメーカーとして様々な課題に主体的に向き合う段階	想定していない新たな課題への言及と発展	



成果：発展の方向性

気づきを触発する橋渡し役となるファシリテーターが不可欠

【リビングラボにおけるOJTの効果】
介護職と技術者(イノベーター)等、
日常の考え方を越えて思考することができ、
日常の仕事では得難い創造的な思考に出会い、
その結果、新たな考えを生み出すきっかけになることが
リビングラボの強みである。

一方で、このプロセスにおいて、多様なステークホルダーが関わる
ことから、言葉の定義や志向する概念のすれ違いや誤解などが
容易に発生しうると考える。

これら事象を是正できる「目的は同じ」「経験・能力が違う」
「その中で、共進し、結果を出す仕組みが必要」と考えられる
「ファシリテーター」が必要と考える。

異分野、異業種、異文化など、多様な状況に対応し、貢献できる
トレーニングと、それを支援するツールの開発が必要となる。

